

日本書紀傳

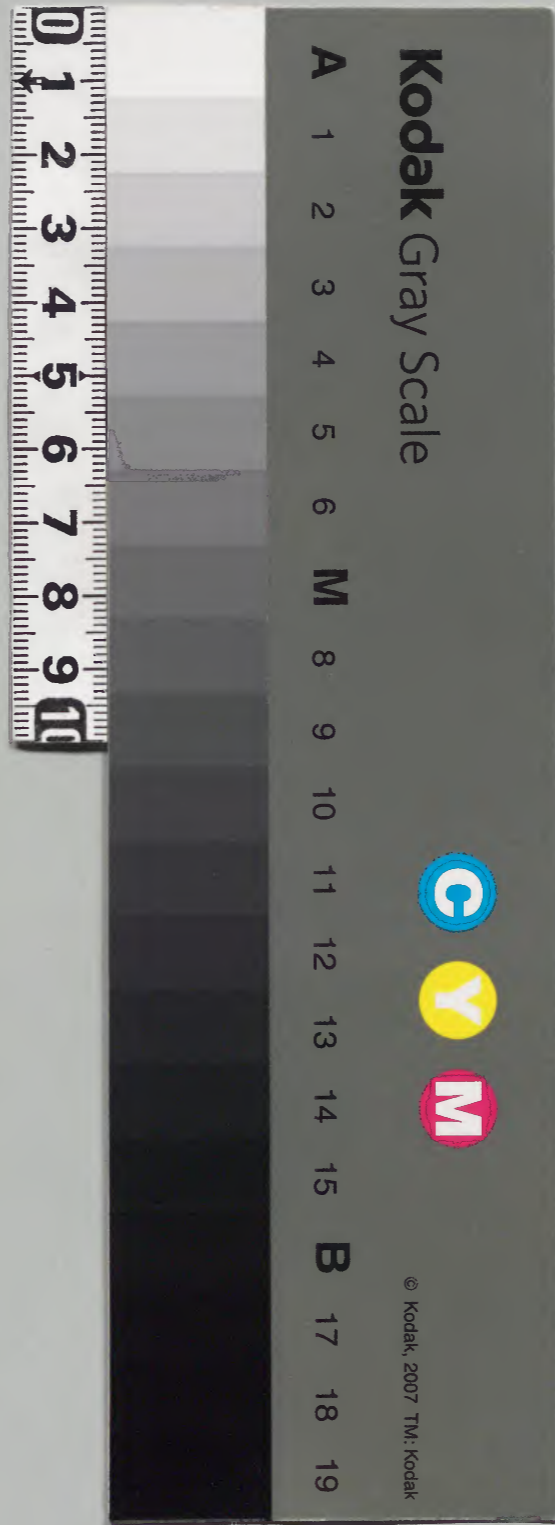
廿三卷四

七十七

和書
一〇五二二號

内一八六八三號

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (86)
函號	附 85 1



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

文部省
印

文部省
印

内一七六八三號

古語
第二一書小素戔嗚尊
勅蛇曰汝是
可畏之神
不敢嚮食之
字乃以八瓊酒
每口沃入其
蛇飲酒而睡
有ハ

國少子支鼻と取むとてハ醇酒を草小西がて相待ハ
必多々集リ是酒氣を好むと來る者之所見たり云
然ハ信ハ第二一書小素戔嗚尊勅蛇曰汝是
可畏之神不敢嚮食之字乃以八瓊酒每口沃入其
蛇飲酒而睡有ハ此所不當ハ文ハ神祇本紀ハ其文を取入て此所を
則隨詔而如此設備而待之時ハ岐大蛇如所言蔓延於
ハ丘ハ谷之間而至矣素戔嗚尊勅蛇曰汝是
可畏之神不敢嚮食之字乃以八瓊酒得每頭一槽飲醉而睡伏寢矣
之書セハ甚委ハ成化者少テ殊小美ナハ其ハ
勅蛇曰汝是
可畏之神と有ハ此時ハ當りテ然御言を
係サセ給ハ可キ御有増多ク然ルハ上件ノ如ク種ク

の御設の御在し坐けりも其好む所の酒を物為て丁
寧小饗應す状小存らへて賺とらし寄せて其甚く飲醉し
伏寝るを度しして斬殺させ御在し坐む御謀計を施
こさせ給へるふれば其事を悟らしめ給ふまじり状
小萬を行はせ給ふ所あり故小掛ましくも甚く可畏き
大神小渡らせ給ひふぐり小其事を秘させ御在し坐
て汝是可畏之神こハ宗まへ詔給へる者小して彼欽
明天皇六年御紀小謂ゆる膳臣巴提便ケ子の仇を報
いむとて其虎小向ひて惟汝威神と云ふとハ其言
同トトト其御心用ひ小至りてハ甚く異ひて反對

ふ所小ふむ有ける然れば通證小引玉木某説小
以折鏡氣之術也云々ハ酒則蛇之所嗜故設之此誘其欲
實小謂れたる事ありけり敢不饗字ハ其可畏き神ふ
る小依て主設け為て此小來る事を勞らハせ給つて
と御言詔し給へるふり此御謀計の状ハ神武天皇戊
午年御紀小既而餘黨猶繁其情難測乃顧勅道臣命
汝且帥大來目部作大室於忍坂邑盛設宴饗誘虜而取
之道臣命於是奉密旨掘窖於忍坂而選我猛卒與虜雜
居陰期之日酒酣之後吾則起歌汝等聞吾歌聲則一時
刺虜已而坐定酒行虜不知我之有陰謀任情徑醉時道
臣命乃起而歌之曰中時我卒聞歌俱拔其頭推劔一時

有れば八門より八頭を挿入れ八座の間毎小各
 頭を垂れて其八槽の酒を飲む事して其精より粗
 きとの差ひこり有けれ此と全同ト事あり者あり
 又縁起小八戸分頭と有し其上文小一戸開八戸各置
 槽と有し相應へたる者ありとも此小思合す可き
 事あり 第二一書小ハ乃以八甕酒毎口沃入と有て素
 戔鳴大神の御自沃入させ給へる趣あり
 若然ふむ小ハ座を結ひ八槽を置お及バセ
 給ふまどき答あり此唯其八甕酒を汲取て沃入
 させ給ふとの傳少て其支度不至りて甚く異
 あり所有者あり地神本紀小乃以八甕酒得毎頭一
 槽と有む且しを古史成文小乃以八甕酒毎口沃
 入之則其遠呂智每船垂文頭而飲其酒矣と有し委
 き小似たりと雖も異説を以然れば此の頭各一槽ハ
 て續合せたり者あり氷あり

△箕踞不及大蛇
 飲其酒各頭
 他於二槽故飲
 盡六槽之酒而
 三有を以て覺奇

△此第一書小
 釀毒酒以飲
 之蛇醉而腫
 有し有

入八頭於八槽と云ふ異ありざる所あり各一槽と云
 る即八槽の謂あり事云も更あり若て此小落志入兵
 の言を讀附る古事記小垂入と有が如く其頭を下
 して酒槽の中小入りと云あり但口訣本官本共小
 飲字を落志入兵も訓たれども其ハ下へ着て飲醉と
 續く字あり然ハ訓べざるを新宮本ハ其如く
 あり右の言ハ上小讀附て添ふ可き所あり事著き
 者なり○飲醉而ハ金澤本不能美惠比兵と有し從
 不可き事右小云ガ如し第二一書小其蛇飲酒と云
 る是あり古事記小於是飲醉と見元又縁起小ハ八戸

△五丁 不能得
能二知波知利奴
得世與斯

分頭飲醉而睡ふとも有り飲ハ万葉三一丁一坏乃
濁酒字可飲有良師又酒不飲人多熟見者又二丁酒飲
而情字遣尔豈若日八方六五丁相飲酒曾此豐御酒
者七八丁遊士之飲酒坏尔陰尔所見管八五丁酒
杯尔梅花浮念共飲而後者落去登母與之又官尔毛縱
賜有今夜耳將飲酒可毛散許須奈由未十九四丁小皇
祖神之遠御代三世波射布折酒飲等伊布曾此保實我之
波ふど有り凡て水を吞む物を吞むと云も同く
此能年ハ加年の對つて齒小觸つて碎く物小嚙と云ハ
然ふずして直小喉内小入る物小飲と云ふけり

和名抄鼻口類小咽喉和名乃無止と有ハ即吞門あり
小思合す可くあり又名義抄小喻小須布又能年の訓
見元一又布久年吃二須布又能年止又能年止布延
須三有四能五年六醫七能八年九又須十流十一見十二之十三又俗十四小誤
能美久良布訓醜能能美保須又能美都須訓
也即說文小飲酒盡醉ハ古事記如屎醉而吐散登許
曾我那勢之命為如此と有る其事を引て己小傳十九
六丁 小云ウ猶其明宮段小於是天皇宇羅直是所獻之
八丁 大御酒御歌曰須二許理賀我迦美斯美岐迹我和礼惠比迹
祁理許登那具志惠具志尔我和礼惠比迹祁理と有る宇
羅直ハ情與云云事小て裡小所思す御心の表小見ハ

日本書紀傳二十三 百二十七

ろゝを云て此、其酒小酔浮れさせ給へる御事を申
 奉れりあり傳十九四七二百七丁嚙樂引註下小引大嘗會辰
 日儀の宣命小黒岐白岐乃御酒赤丹乃穂食惠良岐云
 こと有る惠良岐、右の字羅宜小等、く所見たるを
 以考ふる小惠布、字羅布、酒氣の循巡りて心の
 浮る事と云ふ、万葉三一丁小酒飲而酔哭為師益
 有良之又三丁世間之遊道尔吟者酔哭為尔可有良師
 又飲酒而酔泣為二丁尔尚不如來六八丁小大夫之禱豐
 御酒尔吾酔尔家里十九丁小豐樂見為今日者毛能
 乃布能八十伴雄能島山尔安可流橘字受尔指紐解放

而千年保伎保伎吉等餘毛之惠良、く尔仕奉字見之
 貴左と有る惠良、く酒小酔浮れて笑浮る状
 を云ふ、何れも惠の一言を本と、く云ふ語共ふ
 る者あり土佐日記又源氏少女卷、酔れて云ふこ
 小酔と云ふ酒、小云と同一、其氣の上逆みて我知ず
 成れるを云ふ、又土佐日記、小彼船酔の淡路島の大
 い子云、此が中心、惱む船君甚く愛て船酔し給
 へり、御顔、小似す、有る云、く見ゆ
 船酔ハ和名抄、小苦船布奈夜、非と有る、是あり、か
 其船駕の病、小笑む意、無きを惠布と云ハ、大抵酒小
 酔浮る、く同、意、○睡、衾布流と訓て、第二、一書第
 三、一書あり、然り、熱田縁起、小布志衾多理と訓るハ
 古事記、小於是飲酔留伏寝と有、小依れり者あり、偕此

△諸本共誤りて
死由の二字を
れを

睡字ハ睡眠と熟する字ありけりカ神武天皇戊午年
御紀小予時天皇^{ヨシノミ}寤^{ササ}忽然而寤之曰予何長眠若此字
と有^ナハ眠を伊と訓て即祢布流と同一く目を合す
る事を云ふ寝又寐字を祢とハ奴流と云ハ身を
打伏す事を云る者あり名義抄ハ睡を祢布流又美流
又加須加^ナ又韋祢布理^有見^有説文ハ睡坐寢也と有
が如く其所を去ずして居^{アリ}附たる任^ナハ眠る事を云ふ
れハ古事記の留伏寢の義ハも遠くさる者あり又
抄ハ眠字を祢布理とハ祢布流とハ久良志とハ伊奴
とハ訓り但右の縁起ハ布志祢多理と有ハ強て彼記
ハ合^ナせたる者^ナして^ナ儲右の古事記^ナあり留字^ナ古^ナ記傳
調へり^ナとハ^ナ聞えず^ナ

ハ一字ハて皆字あり可き由ハ云れたるを^{古史第七}
十段徴ハ真福寺本ハ留字と作り抑此留字ハ留字
の一体ハて卯と作くも死と書くも同事あり其ハ柳
字の卯を常ハ死と作して悟る可ハ真福寺本何處
も留字を留と作り然して留伏寢ハ己ヶ元の住處
ハ歸らで酒を飲たる處ハ留^トありて伏寢たるその
事あり^要採^ナと云れたるハ實ハ然^ハ言^ナありて頃年世
ハ出たる伊勢本の字体ハ全ク真福寺本と同一様
ありければ此^師説ハ實^ハ然^ハ言^ナあり者あり^ハ伏^ハ
ハ卧字を^ハ書^テ身^ヲ起^スず^テ横^ニ休^ムる^ヲ云^フ同^ニ記

終靖天皇御紀小
於片五大書中獨臥
于大床三有臥字
と称布世流二訓
ハ此伏寝を倒
反ハ云々あり又
寝處と伏處と云
類是より

又^三夜羽毛夜之
盡卧居難嘆

△十^三小大文之伏居
嘆而

八十神段小於是到氣多之前時裸菟伏也尔八十神謂
其菟云汝將爲者浴此海鹽當風吹而伏高山尾上故其
菟從八十神之教而伏略^下有^ハ更^{アリ}方葉二^三十^小
立者玉藻之如許呂卧者川藻之如久又^三十^鹿自物伊
波比伏管又^四十^荒床自伏君之五^四十^小天神阿布藝
許比乃美地祗布之互額拜云^二伏仰武祢字知奈氣吉
八^三十^小伏鹿之孀呼音字九^七小卧鹿之今夜者不鳴
寢家良霜又^丁十一射目人乃伏見何由井尔^{十一}二^十小
伏以死汝名羽不謂又^四十^山河尔笈半伏而十二^九十^小
小紫草子草跡別^二伏鹿之十六^九十^小今日良毛加鹿

△靈異記小蛇の
事小腹行宛轉
の語有を常小
其

△天孫降臨章第六
一書小皇孫真之
乃爲歌之曰憶企
都茂橋坐不備
反耐母佐社而
阿黨播忍今
播磨都智耐
又書小^三時
夕出見守乃
日飲企都
軒^ハ我^ハ謂
尔和戎事
云々又事紀

乃伏良武ふと外^ハ小^ハ數知ず多在^リ起^三伏^二對^ハ居^三
伏^二對^ハ言^{アリ}又俯^を俛^を布^須訓^ハ又布
志麻呂布^云小當^テ轉^輾の字^を書^ると毛^詩註^小卧
不安席之意^云注^一文^選小蹠^の字^を訓^ると字^書小
失足自^云云^ハ又^又蹠^轉の字^を訓^る事^ハ共^ハ何^レ也
伏^を本^と爲^ス寢^ハ臥^ス事^の称^ハ目^を合^ス事^を云
時^ハ伊^奴伊^奴流^云活^ク言^{アリ}古事記須佐之男命段
小尔其大神出見而告此者謂之葦原色許男即喚入而
令寢其蛇室云^ハ故如教者蛇自静故平寢出之云^ハ其
大神以爲咋破吳公唾出而於心思愛而寢云^ハ故其所
寢大神聞驚而引仆其室^ニ見^元其^白檮原宮段小天皇
幸行其伊須氣余理比賣之許一夜御寢坐也後其伊須

氣余理比賣參^中内之時天皇御歌曰阿斯波良能^原
志^醜祁去岐袁夜逆須賀多^疊美伊夜佐夜斯岐氏和賀布^我
多理泥斯又景行天皇四十年御紀小是夜以歌之間侍^人
者曰珥比^新麼利菟玖波塢須擬^過氏異玖用加祢菟流^{何夜}ふど
猶餘多有を一二採出^のあり万葉一九丁小我
宿有衣乃上從二丁十八小玉藻成依宿之妹子又十九左
宿夜者幾毛不有又一丁二十玉藻成籙吾宿之又一丁三十劍刀
於身副不寢者云々草枕旅宿鴨為留又九丁三十吾妹子與
二人吾宿之枕付孀屋之内尔又一丁四十劍刀身二副寐價
年四二丁三十小皆人子宿與殿金者打礼杼君子之念者寢

不勝鴨五^{三十}小楚取^三五十戸長我許惠波寢屋度麻低
來立呼比奴六^{四十}小妹之手枕卷手寢益乎又六丁四十曉
之寢覺尔聞者又七丁四十真十鏡見宿女乃浦者七丁二十小
夏影房之下庭十^{二十}小遥嫺等手枕易寢夜又左屋始
而何太毛不在者又九丁二十公常不宿孤可母寐又一丁三十佐
宿者年之度尔直一夜耳又八丁四十物念跡寐不所宿又十五
七秋之長夜子寐師耳十一丁六小朱引秦不經雖寐又十二
二敷細枕動而宿不所寢又人之手枕而將寐兒故又十二
四妹與吾寢夜者無而又七丁二十如何為跡可吾宿始兼又
二十丁君戀寢不宿朝明又九丁二十寐吾來子人見兼鴨又十四

△字其下其新
蛇號曰蛇之處
正書之れ次小

一左寐蟹齒孰共毛宿常十二三玉又卷宿妹母又五黒
玉之宿而之晚乃又十四人之宿味宿者不寢哉十三
丁小指易而將宿君故又三十浦裳無所宿有人者其外
小も多在るを右小寢をも寐をも宿をも通々用ひ
たる字義小も直りて考ふ可し名義抄小寢字と寢小
作りて意富登能基母流と訓とを源語小多く寢る事
を大殿オホトリノミヤリ隱と所見たり又此小て睡眠ネブルと伏寢フシヌルとの差別
有る事を曉る可し又伊奴イヌも布須フスも云訓有る更
多理タリも訓と宿字を與流ユルも夜杼流ヨシユルも伊奴イヌも祢
臥イすを云事ありを○乃按所帶十握劍トウ第二二書小
明らむ可くある

ハ拔劍斬之と有て御劍ミツルギの名無ナシ第三二書小ハ乃以
蛇韓鋤之劍と見え第四一書小ハ乃以天蠅斫之劍と
有て此三ハ其十握劍の名あり古語拾遺小ハ天十握
劍と書して其本註小其名天羽羽斬今在石上神宮古
語大蛇謂之羽羽言斬蛇也と所見たり其羽ハの事ハ
傳二十七三十五丁小註す可し然して其天十握劍と云ふ
天ハ此大神の天上より將來る世御在り坐けは御事
小依れらるる可き事申すも更あり備十握劍の事ハ
傳十七丁小云るが如く口訣小十握以四指計十也と
有か何と無く唯小劍ツルギとの云て有ぬ可き所小十握

劔云ハ殊更ハ深キ所以有リ事アリケリ其ハ神代
 小ハ握劔九握劔十握劔等の三劔有テ此を大刀ニ云
 不即刀子の小刀アリ對ヘタル祢アリ備又傳十九百
 七ハ十云リ狀小上世ハ鏡ハ八咫鏡ニ云ハ瓊ハ八
 坂瓊ニ云ハ尺寸の事ハて其身の度ハ應ヘテ造レリ
 一者アリガ劔ハ其如クハてハ握九握十握の祢有ケ
 其用不可キ事ハ大小ハ依テ劔ハ長短の用異アリ
 けリ者ニ及ビ所見ナリケリ然レども劔ハ十握を極
 一として其及バざる所ハ矛を用ヒ其又至ラマ
 一所ハ一矢を以テ向フ可キ自然の勢ハ及ビ有ケ

天孫降臨章小大
 葉研不作ル倍字
 有

一劔ハ十握を極メアリト云ハ上古の法其四指を以
 一て布テハ搏ふをハ握ニ云ハ九握ふを九握ニ
 云ハ十握ふを十握劔ニ云ハ十握の事ハ其持所切
 記アリ阿志貴高日子神ハ十握劔ハ其手を以
 大刀名謂大量ニ有を以考ふるハ十握劔ハ其手を以
 一量リ其長さの極メガ故ハ大量ニ云ハ是ハ大
 刀を作リ故實其十握劔を大節ハ被用タル例を云ハ
 一之所見ナリハ
 小ハ四神出生章第六一書ハ遂按所帶十握劔斬軻遇
 突智為ニ段此各化神也ト有ハ伊弉諾大神ハ其甚
 一ハく思マセ給フ余ハ十握劔を用ヒさせ給ヘルハて
 大神リハ尋常ハ神ハ御在リ坐サレバハ天孫降
 臨章ハ經津主神武甕槌神の征伐トシテ天降り給ヘ
 一ハ所ハ則按十握劔倒植於地踞其鋒端而問大己貴神

日云、之有、葦原中國の荒振神を事向給ふ大節ふ
りけれ、其十握劍を用ひ給へり、其第一一書小
時味耜高彥根神怒曰云、乃拔十握劍斫倒喪屋其屋
隨而成山此則美濃國喪山是也、之有、下りて山と成
る計り大あり、屋を斫倒し給ふ為あり、故小十握劍を
用ひさせ給へり者あり、然傳三十四百大葉州の所云也此と其例あり、而て八
丘八谷の間小蔓延る計り大あり、蛇ふり有けれ、此
亦ても天十握劍を用ひさせ給へり、けむ、然も御在
し坐つ可き御事あり、斯りけれ、何と無く唯小
劍との、云て有ぬ可き所、十握劍と書れたる、小

地神本紀此蛇爲
八段毎段爲雷
有小思合す可
此と又

有べり、さる者小ふむ有けり、但瑞珠盟約章第一一
劍九握劍ハ握劍の三劍を並舉りたり、其所小十握
物を斬断の用無くして、其御誓の御爲ふ、其正書
小十握劍の御事の出たり、○寸斬ハ縁起又地神本紀
共小寸斬其蛇と有り、即第三一書小謂ゆる、斬頭斬腹
其斬尾、之有、如く段と小斬断せさせ給へり、御事ふ
り、天淵記小斬蛇寸寸と作ハり纂疏寸斬者寸斬之也と有り、同、事あり、借此二字
の訓を都陀ニ、尔伎流と有、甚く後の事あり、むと
思ひつる、小名義抄小寸字を伎陀ニ、又都陀ニ、と
有、其言義を未得ず、難し、其古言あり、事此を以て
知り、れ、猶本の任小訓て有ぬ可く、ふむ所思ゆる

但伎陀こゝと同言ありこゝ聞ゆらあり然るハ古事
 記ハ此を切散の字を書れたりハ出雲風土記を見
 此ハ童女曾鉏所取而大魚之支太衝別而波多須ニ支
 穗振別而三身之網打挂而霜黑葛閻耶耶耶ハ河船之
 毛ニ曾ニ呂ニル云語有ハ國の餘を割取りせさせ
 御在ハ坐て出雲國小引來給へハ文あり其大魚之の
 之ハ如の義ハ大魚ハ切割て用ハ物あり故ハ發
 語ハ置るのそあり支太ハ寸字又ハ段字ハ當りハ波
 多須ニ支ハ發語穗振別ハ屠別ハ切散ハ義ありハ
 此ハ寸斬を都陀こゝと訓りも右の意ハ合り者あり

遊仙窟ハ但寛
 寸字ハ須陀ハ
 伎陀ハ

日本靈異記ハ又其蛇來登於屋頂拔草而入女棘ニ
 焉唯來前有跳爆之音明日見之者有一大蟹而彼大蛇
 條然段ハ草拔ハ落ハ於女前雖然蛇不ハ就ハ女身唯有爆
 音如跳齧ハ明日見之ハ大蟬ハ集彼蛇條然擲段切之云
 寸斬大蛇ハ有ハ事ハ就ハ様ハ小意を補ハ不可ハ所
 不ハ有ハける地神本紀ハ此蛇為ハ八段每段成雷總為ハ
 雷飛躍昇天是神異之甚矣ハ見ハ元ハたり此事釋紀寸斬
 の下ハ私記曰師說此蛇斬為ハ八段即每段成雷云ハ
 書ハて右ハ今ハ同文ありハ決ハめて古傳あり可ハき
 者ありハ少ハ注ハして此蛇為ハ八段ハ云ハハ右ハ引ハる身
 三ハ一書ハ寸斬頭斬腹其斬尾ハ有ハる三段の事ハ異ハハ

るして其斬頭と云事の議あり其一時ハ頭を斬落
させ給へりけむ即飛去て雷と成れるあり其ハ
傳十一五十ハ右の文を引て云るが如く龍蛇と雷
この別あり物の如くあれども雄略天皇七年御紀ハ
三諸岳神の事を乃登女子部連螺贏ハ仰給へる所ハ三諸岳捉取大蛇奉示天皇天皇
不齋戒其雷虺目精赫々天皇蔽目不見却入殿中使
於岳仍賜名爲雷と云事見えたり此正身ハ大蛇あれ
ども其可畏き狀ハ依て雷と云るが如くあれども然
らず此事を靈異記ハ當於時而空雷鳴即天皇勅柶
輕而汝鳴雷奉請之耶云々と所見なれば其雷と成て

落たりも此を提提之れハ大蛇して有けりあり斯れハ
此ハ其八頭の八段ハハ斬られ奉りて八雷と成て天
ハ昇れりと云ハ八蛇と成て飛躍トハ者あり可
己ハ上六十ハ云るが如く彼日本武尊を懼す奉れ
りハ膽吹山の太蛇ハ其八雷の一ありと聞えて神社
考ハ謂膽吹神爲ハ蛇岐大蛇之所變也と有ハ此ハ合て
必受る所有る説とあり所見たりける故此ハ岐大蛇
ハ己ハ師説ハ謂ゆる氣吹雄命の化なる者ありけり
ハ其体を如此く斬られ奉りてハ其靈の寓宿る可き
物無ハ故ハ八雷と化て分れたる物々然其体を

而壓死時陳其屍而斬之流血沒踝故号其地曰菟田血
 原之有小似たり故比寸斬大蛇之事天淵記寸二
 蛇流山滯所謂之來次八本杉矣腹皮流止處謂之皮原
 八尾流落處謂之三刀屋尾崎蛇枕寄處謂之草枕置八
 槽地乃天淵之坤隅也中古燒濱也今成田謂之鹽田悶
 熟宛轉匍匐舊跡猶存岩天淵東岸是也東岸有樵徑二
 以上山腹至絕頂數十餘丈皆鐵塢也居人謂之鉄築
 地蛇從淵窟通八頭坂山底之熟路也昔長者以冶鐵橫
 塞大蛇之熟路云略中又東岸盤渦之底有三尺餘圓穴其
 中渺水也茫々而無滴水蓋蛇窟宅云尔之所見たり

少て太抵、知らる可し又出雲社記小仁田郡與佐田
 村與大原郡久野村堺有八頭坂斬八岐蛇處也云事
 有然れども第三一書小其斬蛇之地則出雲國鞆之川上山是
 也之所見又右の天淵記し置八槽地乃天淵之坤隅
 也云云れ即鳥上山の林麓し謂ゆる鞆川の西岸
 有る處在て其地小於て其大蛇を寸斬らせさせ給へる事決き
 を蟒蛇の類ハ其頭頸を截断れたる後し其死る事
 の遅くして猶荒巡狂ら者し有ければ其八岐頭
 坂まで追迫させ御在り坐て斬盡させ給へりけむを
 然も傳へたる者こころハ思はるし其八頭坂ハ天淵
 記小於越經大原

或書小仁多郡布
 舞那今布勢村
 下布勢村二村小合
 れたると其土布
 勢村小大蛇池浪
 越坂八頭坂岩布
 旋山等の地有り
 其地小脚勢乳
 手勢乳二神の
 像有云云此地
 なり

を鈔其大原社を三澤郷尾原村(石)岩埦大明神と云
 ひ石壺社を同郷石村御崎大明神と云其岩埦石壺
 共小石穴の事小して謂ゆる石窟是あり由傳十九
 十三小註るが如く然れバ右等の石穴も本大蛇の通
 ひ住へるふどの迹ありを以て後小其社を定めて祀
 ひ(祀)つかり又ハ其大蛇を鎮給へり素戔嗚大神と
 齋奉りしあり可し次小蛇枕寄處謂之草枕ハ社記
 小埋蛇頭之處草枕山ハ口是也と云り神名或不出雲
 國大原郡八口(神)神社風土記小矢口社小作れを鈔
 小神原郷草枕村八口大明神是也と云り然る小神名

式小尾張國愛智郡八劔神社御在り坐を天野信景が
 集説小熱田大宮南或称下宮和銅元年九月鎮座素戔
 嗚尊和魂也と有と奈鼎と云けり人の咤咤雜史と云
 物カハ八劔宮和銅初建り素戔嗚尊の和魂を祭る
 出雲國大原郡八口神社同体小して社号口授の秘有
 小と有と以思ふ小右の(大原)神社ハ素戔嗚大神の和
 魂小御在り坐て彼八岐大蛇の崇靈を鎮めさせ御在
 一坐りあころ有けり斯れハ右小舉る社の中此
 の怨靈を鎮めたる者ありハ口神社を陰てハ皆ハ岐大蛇
 畜共小八衢比古ハ衢比賣久那斗の三神の御馭めを
 受奉り御定る事傳十二卷六十五丁小註るが如く
 故其所小云り祇園社の東間小御在り坐すハ王子ハ

も焼つる事の有つら 又其次小悶熱宛轉匍匐跡猶
むを何々の疑ひ 存岩天淵東岸是也云々の其上文小素戔嗚尊計奇
計置八槽醞舟又作艾偶女装之置東山頂其影沈八槽大
蛇見之爲真女便矯八頭飲八槽中無女仰見山頂無端
吞艾女執悶素戔嗚尊拔所佩十握劔斬蛇寸寸云小
相應せたら文小して紀記の趣小ハ全く合さる事ふ
が艾偶女と拵らへて真女と思ひせて令吞給ひ又
其小就て悶熱アツカの苦ク宛轉マヒ匍匐ヒて終小公ら處を知
すして其處小留り伏寝て大神小斬られ奉りけむ
ハ信小然し有ぬ可き事あり然し十九上十九小己

小粗云々如く此正書の首小是時素戔嗚尊自天而
降到於出雲國簸之川上山時聞川上有啼哭之聲故尋
聲不見往者云々有二書小到出雲國簸川上所在鳥上
之岸二同トくして風土記小仁多郡鳥上山郡家東南
卅五里白菴與出雲之有二是二此を第二一書小
ハ是時素戔嗚尊下到於安藝國可愛之川上也有ハ
同記小意字郡長江山郡家東南五十里有氷有二地
小して古小安來國と云る是あり然れども其長江山
ハ初めて天降り御在一坐一著せ給へる處小して其
より簸之川上一移ろ一御在一坐一大蛇を退治さ

七給ふ御謀略已不成て其亡び給へり地ハ彼三
澤郷あり天淵してこりハ有つめ第三一書ハ其斬
蛇之地則出雲敷之川上山是也と有ハ其敷川の水源
あり山云事あり鳥上之岑を指すハ非ずして其
天淵の所在の山と云こ所見たり天淵記ハ仁多郡三
津郷桶河上天淵者云去杵築海濱十許里也去温泉
者十許餘町之下流有焉云云温泉ハ風土記仁多郡條不通飯
石郡塚漆仁川邊廿八里即川邊有藥湯浴之則身体穆
平再濯則萬病消除云故俗人號云藥湯也と見え飯
石郡條ハ通仁多郡塚温泉川邊廿二里と有是を云

るあり其記の文法を見るハ桶河上の事を仁多郡ハ
てハ何れハ斐伊河上と云ハ其より下飯石郡ありハ
斐伊河と云ハ其より下大原郡ありハ斐伊大河と云
ハハ此を敷之川上山と云て違へるハ非ず者あり
其天淵記ハ於越經大原郡福武莊到八頭坂麓長者云
ニ又你何人對曰我名脚摩乳妻名千摩乳少々名稻田
姫而我是此地主也と有ハ右の斐伊大河の東ハ在少
次ハ又河西山腰泉涌出焉以桶通之河東故呼水爲桶
河云事有ハ風土記ハ大原郡斐伊郷屬郡家桶速日
子命坐此處故云桶神龜三年改字斐伊と有と知ず桶
字ハ就て説を成せり者あり云ハ足さる事あり
其次ハ又此去河上二里有餘有深溪名天淵即大蛇之
窟宅也と有ハ其斐伊大河の西岸飯石郡の續きあり
河上二里有餘あり其斐伊大河の西岸飯石郡の續きあり
石便宜と成り其温泉川一名漆仁川と云て知べ
石仁多二郡の塚ハ當ルハ天淵ハ此邊ハ在る

日本書紀傳二十三
百五十三

事ふれ信不難之川上山云ふは是なる可く
所思元たる然れ此斬蛇の地を今まで強小鳥上
之容その思ひし猶至らざりけり天淵記
ハ後世の成れる者雖も其地を推て書せり物難
有れば紀記の注釋の如き者あり但中ハ信ひ難
事將勘らざれば前後の文を合せて正し讀ず有
べし ○至尾劔刃少欽欽 第三一書ハ斬頭斬腹其斬
尾之時劔刃少欽有ハ其次第を云て事の委しき者
あり 第二一書ハ抜劔斬之至斬尾時劔刃少欽第四一
書ハ斬彼大蛇時斬蛇尾而刃欽ふど有ハ其旨相異ふ
らざる者あり 古事記ハ故切其中尾時御刀之及毀
と有ハ此(例)も同ト事して其上文ハ身一有ハ頭ハ尾
と見えたる其ハ岐と成れハ中央の尾を斬らせ給ふ

閻

御時小當りて御手小應へて御刀の刃の欽たる事を
詳明小して彼神劔を藏し持たる其所在を云る者ふ
り 然る小項年出たる伊勢本ハ右の其字無くして切
ハ中尾時と作て中字を阿都流と訓る事ありども其
尾ハ切中と云ハハ閻ハ切當たる事ハ成あり此
第三一書の如く頭を斬り腹を斬り其尾を斬るこ次
第を正して上ハ下ハ切給へるハこ有けれ尾ハ
切中と云ハハ拙き斬様を如何てらハ爲させ給ハ
ハ中字記傳ハ説の如く然れハ至尾ハ頭ハ斬下
那加マ訓て有べくこ然れハ至尾ハ頭ハ斬下
けて其尾ハ及ふを云あり 劔ハ四神出生章第六二
書又古事記平國段ハ出づ都流岐能波と訓べき由
傳ハ十ハ下ハ云り少欽ハ伊佐ハ加訶祁伎と訓べし古
事記ハ右の如く少字無ハ故ハ御刀之刃毀ハ毀字

日本書紀傳二十三

百五十四

和名抄不亂和名
波加多毀也
有る此語用る
事あり

を記傳不波加祁伎之訓ハキ即上章第一一書不是時
以鏡入其石窟者觸戸小瑕コホ之有ハ事ハ異ハありあぐ
語勢相類たり所あり借劔刃の右の如く毀コホる云も
其大神の寸斬クニらせさせ給へる事の甚く峻クニく御在
し坐せり御有狀を伺知奉る可き所あり者あり
其ハ其斬らせ給ふ御事の緩く御在し坐せりむハ
少歎コホ云ハ至らせ給ふより其十握劔を打
振て斬殺し給ふ御事○故割裂其尾視之コホハ縁起
の烈コホきを云るあり
此と同文あり第二一書ハ割而視之コホ作り第三一
書ハ故裂尾而省と書ハ第四一書ハ即摩而視之
と所見たりコホ右等コホ割裂コホ唯コホ佐伎氏之訓む

其下不故取比太力
思異物而有
應之所あり如何
成し其斬給ふ
物不觸ルて劔刃
を知らず其物の
為小劔刃の歎たり
を知らず其物の
其尾を刺害て
所思見む
世給へる是あり
此言ハんて

可し上ハ謂ゆ斬ハ頭腹尾と漸次ハ横ハ截断つ事
ありを此佐久ハ堅ハ割裂せ給へるを云あり天淵
記ハ割是之中マ云るも其尾の中心を刺割せ給へる
御事を申せるあり借古事記ハ御力之刃毀尔思怪
以御力之前刺割而見者マ續きたり思怪マ公事の異
りたりコホ物コホ不コホ當りて其來由を不審コホ義あり其石屋
戸毀ハ天照太御神以為怪細開石屋戸而云ニ天照太
御神逾思奇而稍自戸出而臨坐之時云ニあどの類多
在るを考ふ可し故此の思怪マ云ハ口訣ハ刃少歎者
當有物コホ子コホ云註ハ合る所あり然ハ當有物コホ
ハ物の有るコホ

所小物の有ハ此ハこウ御劔ハ飲タりキけレ然ル
ハ其物ハ如何ニして有ケるコトとモ寤メこセ給ハずテ
ハ留止すコトセ給フ者ヲヤ
○中ハ尾中を云フ第二書ハ則劔ハ尾中第四一書ハ尾中有一神劔ニ有ル是
之ヲ天淵記ハ至尾ハ少欽割是之中ニ有ル右ハ同
一キを唯古事記ハ切其中尾ニ云ハハ岐ニ成リてハ
尾有ル其左右ノ兩端有ルハ非ズて其中中央ハ在
る尾を云フルハ其中尾ハ尾中ニハ別クあり思混シる
事勿レ此ハ有一劔ハ比登都能劔有理ニ訓ベ一第三一
書ハ此ニ同トきを阿夜志伎劔ニ訓シ又第四一書
ハ有一神劔ニ書ル此ハ次ハ謂フ草薙

劔ニ云フ稱ハ日本武尊ハ起ル此ハ稱シて本ノ名ハ云フ
るハ非ズ又本名天叢雲劔ニ有ル大蛇ノ上ハ雲氣
の常ハ有ルを以テの稱シて本名ニ云フ猶ハ初ノ名
ハ非ズる斯ハ此ハ一劔ニ有ル下ハ神劔ニ有ル
も其名を指スるコトずテ唯ハ劔ニ云フ義ハ然ル是ハ不
真ハ當昔ノ傳ルハ有ベき此ハ一劔ノ事ヲ古事記
ハ都牟之大刀ニ有ル其ハ大刀ノ交利ヲ以テ以
て云フ稱シて此劔ノ名ニ云フも非ズる記傳九丁ナ
小都牟之俗ハ都豆加理ニ云フ同トき由テ説ル此
たハ實ハ然ル言フ伊勢太神宮有神寶ノ中ニ在ル

須我流横刀之有須我流之此の都牟（新）ハ同言
るハて今刀劔を抜くハ須良理ニ云ハ（腫）物を清く断
つ事を須都伎理（豆）都加理ニ云ハ同ト状あり言
とふハ聞えたりける（命）證ハ都牟（新）與都留岐通倭建
事記ニ云リ然レハ（都）流岐ハ劔の多知亦見古
こハ其尖く截りハ状を云ハレハ右の説ハ冠辞考ハ
も出たり説ハ（此）所謂草薙劔也（天）孫後ハ
日本武尊（下）此称有て世ハ名高き故ハ所謂ハ云
るあり第二一書ハ是號草薙劔ニ見元第三一書ハ名
爲草薙劔ニ有レ後ハ称を始ハ及不（下）たり者ハ事
此第四一書ハ此今所謂草薙劔矣ニ有レ今字ハ日本

武尊以後を指云ハハ心を著て曉り可ハふハ有ける
縁起ハ此ニ同ト傳ありハ此所謂叢雲劔也ニ書ハ古
語拾遺ハハ得一靈劔其名天叢雲ニ有ハ其本名を以
て記せる意あり可ハくハ實ニハ所思ゆ者クハ古
事記ハ在都牟（新）之大刀故取此大刀思異物白上於天
照太御神也者草那藝之大刀也ニ有ハハ素戔嗚太
神ハ此得させ給へハ當昔ハ唯大刀（二）のニ云ハハ
て天叢雲劔ニ云ハ其ハ後ハ出來ハ名あり可ハ
ハむ事右ハハ己ハ云ハガ如ハ然ハハ都牟（新）川之大刀
ハを美称へたり称ハハ有けるハ其名ハ云ハハ非ハ
ハ其始て得させ給へハ御時の美称ハ傳ハハハ

可云つ 備此大御劔ハし天照太神の天石窟ハ御在
し坐し時ハ近江國伊吹山ハ落し給へりし御劔あり
事己小傳十九百六十五ハ十ハ註るか如し然る小寶鏡
開始あどハ引る古書ハ彼御天降の時ハ授けさせ御
在し坐けり此草薙劔の御事を十握劔ハ所見たれハ
當昔天上ハての祢是あり右ハ十握劔ハ云ひ此小草
薙劔ハ云れハ傳十七ハ九十ハ小云るか如く劔ハハ兩刃ふ
るを云祢あり又古事記ハハ草那藝之大刀ハ見えて
大刀ハ片刃あり刀の大ありを云あり然る小同記日
代宮段ハ以其御刀之草那藝劔置其美夜賣比賣之許

△りたが子夜尔
緒ハ境の表あり
を夜讀ハ尾
係

而取伊服岐能山之神幸行ハ有て其神氣ハ中ハ此ハ
セ御在し坐て御惱ハ坐る終ハ此時御病甚急ハ御歌
曰袁登賣能登許能辨ハ和賀淤岐斯都流岐能多知ハ曾
能多知波夜ハ歌ハせ給へる是ハ都流岐能多知ハ
有り然るを神名式ハ伊豆國田方郡劔刀字夜尔命神
社ハ有る劔刀ハ發語ハ尾へ係ハあり其尾ハ即
古事記ハ故所斬之刀名謂天之尾羽張亦名謂伊都之
尾羽張ハ云ふ尾ハて其芒端ハ云ふハ常ハ劔ハ
突を主ハ刀ハ断を專ハ爲るを其兩用を相兼た
を劔刀ハ云ありけり然れハ此大御劔の製衣ハ全く

劔の状ふむ御在し坐すハ聞えたる
斯ハ劔云
云ハ大刀云ハ偏刀ありを云ふ事ありハ劔を鋒を
以て突を主とし大刀ハ刃を以て截を專と爲る事ふ
るハ其を劔之大刀云時ハ右の両用故此大御劔ハ
を相兼て實ハ尖利ありを云祢と聞ゆ故此大御劔ハ
しと豈大蛇の尾中不有たら毒針の如き物ありむや
掛よくも甚も可畏き天照皇太神の御物して此も謂
ゆも十握劔して御在し坐けりあり或説ハ此ハ作北
る劔ハ非ず蛇の尾を云ふ凡て蜂蠆の毒針蜈蚣の
牙魚鱗の鱗不至りても自然の劔帯あり今大蛇の尾
年所を経て堅^堅穿^穿ふルハ斬不至りて刃を損^損たらむ
見り可^可實劔ハ見べく^くずと云り其ハ凡て蟒蛇

の類ハ大小鐵を忌怖る^る物あり所以ハ天淵記ハも
昔長者以^以治鐵横^横塞大蛇之熟路云^云有ハ信^信く^くぬ
事^事あ^あづ^づ蛇の禁忌^物を以て其を避^避たる事を云ふ然
ルハ眞の御劔ありむハ如何ハ尾中不收る事の有
むと思ふより右の或説ハ出たりける者ありめども
上^上ハ^ハ不^不引^引る師説ハ此大蛇を氣吹雄命の所變あり
由^由ハ^ハ亡^亡レ^レた^たら^らハ實ハ然^然る言ありて然計の甚^甚ド^ドヨ
荒振神ハ有けれバ又如何ハ^ハ有^有つ^つ方^方有^有て^てこ
ろハ尾中不收めたるあり可^可う^うハ^ハけ^けレ^レ但^但上^上百^百三^三十^十ハ
舉^舉た^たる古事記ハ見^見其^其腹^腹者^者悉^悉常^常血^血爛^爛也^也云^云ハ縁^縁起^起ハ

其腹皆爛壞也。有ハ其主神ハ氣吹雄命云云。神ハ
 有ハ此己ハ蛇体ニ成テハ其鐵氣ハ犯スル事ヲ
 得ス此を以テ其身ノ多ク腐爛ル事ハ有ベ
 得。此ハ古語拾遺御天降段ハ即ハ八咫鏡及草薙劍ニ
 種神寶授賜皇孫ニ有ハ應ヘテ其下ハ至于磯城瑞垣
 朝漸畏神威同殿不安故更令齋部氏變石凝姥神裔天
 目一箇神裔二氏更鑄鏡作造劍。所見たり蛇尾ハ換
 テ何^真劍を令造らる事ノ御在ハ坐む此を以テ
 ハ天淵記及神社考等ハ天照太神ノ天石窟ハ入給ヘ
 シ御時ハ散亡テ伊吹山ハ落たり云古傳ノ實ハ

舊磐

命神出生章才九
 吾是謂岐神
 此本號曰來名戸
 之祖神焉之見元
 乃多^ハ神武天皇
 御紀ハ夫磐石之
 地舊名片居亦曰
 片立之有^ハ舊名
 是也

信ハ不可きを知ルリキ。谷重遠説ハ己寸斷大蛇
 神劍者敬格于天也云云。尾猶不放過之得
 べ^ハ出^ル者^ハ其尾中^ハ秘^シ持^リ神劍^ハ出^ル格^ハ時^ハ有^ル
 此ハ非^ズ又自然^ニ故^ニ此^ハ御劍^ハ生^ル事^ハ非^ズ天^ノ針^ニ
 小ハ非^ズ又自然^ニ故^ニ此^ハ御劍^ハ生^ル事^ハ非^ズ天^ノ針^ニ
 百六十丁^ハ小^ハ云^フを猶^下御物^ハ事^ハ己^ハ傳^ハ十九卷
 云^フて^ハハ。○本名天叢雲劍云云。本名ハ本文ハ所謂草
 薙劍也云云。後ノ称呼ハ對^ヘテ云^フハ應神天皇御
 紀ハ初^ニ天皇爲^ス太子行^キ于越國時拜祭角鹿筭飯大神時
 大神與^テ太子名相易故号大神曰去來皃別神太子名譽
 田別尊然則可謂大神本名譽田別神太子元名去來皃
 別尊^ハ有^テ本名を元名^ニ云^フリ此例猶神名式ハ山

日本書紀傳二十三

百六十

攝津國住吉郡
大海神社に見る
下小元名津守氏
人神有り

城國葛野郡大酒神社を下小元名大辟神と有り大和
國十市郡天香山坐櫛真命神社大月次と有り下小元
名大麻等乃知神と有り隱岐國知夫郡海神社二座こ
有て下小元名和多須神と見え何れも始名と云義
小て亦名小對へる本名小ハ非ず其亦名小對へるこ
云ハ譬へバ日神の
御事と天照皇太神と申奉るハ正名小て謂ゆる御本
名と云者あり又大日靈貴尊と申奉る如きハ亦御名
小渡らせ給へるを申すあり若て此ありハ本名天藪
雲劍小て亦名草薙劍と云小ハ非ず舊名と綴祿との
謂ふ傳十二卷四故景行天皇四十年御紀小一云王
十九丁見る可後
所佩劍藪雲自抽之薙攘王之傍草因是得免故号其劍
曰草薙也藪雲此云茂羅玖毛
見元此小至日本武皇子改名曰草薙劍

こ有ガ如く神代より以來日本武尊の謂ゆる野火難
小遇せさせ給へり一當昔までの舊名を天藪雲劍と
申せり一ありけり諸右小藪雲此云茂羅玖毛ハ此
續き小大蛇所居之上常有雲氣と云る是あり若て此
雲氣と云ハ大蛇の氣を吐て雲と爲れと云小ハ有
べりぬず斯る奇異小神靈アヤき大御劍あり故小其
大蛇の深く秘藏るウカシモタ雖も其神氣の秀出て上不見ハ
る小て彼雄略天皇三年御紀小栲幡皇女の説ヒコトり此
させ御在り坐けれハ俄而皇女賣持神鏡詣於五十鈴
河上伺不行埋鏡經死天皇疑皇女不在恒使闇夜東西

香具山日記其
 大蛇常住之傍有
 奇雲氣之有と
 以て尋常の雲小
 非多事を明らむ
 可
 △下學集小初此
 蛇帶劍時其尾常
 有雲氣故曰天蓋
 雲劍と有り

求不見乃於河上虹見如蛇四五丈者堀虹起處而得神鏡
 之有也其皇女の持せり神鏡の神氣虹の如く蛇の
 如き狀して其埋在たる土中より虚天不見ハ此昇化
 るありハ其をも雲氣ハ云ハ云へく此大蛇の上
 あり雲氣をも如虹とも云る可くして共ハ其神物の
 靈氣見發此者あり次ハ素戔鳴尊日神劍也
 詔給へるも斯る靈瑞をハ見行ハ御在坐てこ
 ハ御言小告給へりけり故纂疏小猶如豐城劍氣射
 けり又雄略天皇御紀通證小引る吳書曰初堅入洛軍
 城南甄宮井上每且有五色氣堅命之浚探得漢傳國璽
 之有西蕃の酋長ハハ我皇御孫尊の御奴として
 彼國の人民を馭むる官吏の如き者あり渠が傳國璽

云云ハ作の物ハ然る靈端有ける者を況てや此
 ハ天照太神の御物ハ皇御孫尊の天津璽授傳
 へて給ふ程の珍寶ハ○蓋云ハ傳七百九
 御在坐を思ふ可くハ○蓋云ハ傳七百九
 云り○大蛇所居之上ハ縁起ハ此小同ハ古語拾遺小
 ハ大蛇之上ハ有て所居の字無ハ此字舊訓の任ハ表
 流ハ訓ハ神功皇后御紀ハ折鈴五十鈴宮所居神云
 於尾田吾田節之淡郡所居之有也見元天武天皇
 元年御紀ハ吾者高市杜所居名事代主神ハ牟狹社
 所居名生雷神者也ハ見元例是あり上ハ字ハ例
 の字閉ハ訓ハ常ハ上ハ字富登理ハ訓ハ事ハ此
 此ありハ其上方ハ射て立升○雲氣ハ此ハ因て其
 物有る云ハハ字閉あり

○日本書紀傳二十三

○百六十二

劔名を天叢雲劔と名くる所以を思ふ不彼叢雲此云
茂羅玖毛と有と等しく訓ふる可し此ハ八岐大蛇の
尾中小神劔を收藏し深く包むと雖も其氣の上小發
見北て藪ぐる雲の如く變隸たりしを云ふて眞の雲
ハ非りし故ハ殊更ハ氣字を被加たる者ふれども
古き任ハ此二字を引合せて玖毛との訓てハ其劔
名と相當らず故此ハ其意を得て雲氣を此ハてハ茂
羅玖毛とふむ訓べし事ありける猶叢雲と云例ハ中
臣壽詞ハ天忍雲根神遠天乃ニ上仁奉上也云ニ天忍
雲根神天浮雲仁乘_云天乃ニ上仁上坐_云云と有ハ

謂ゆる水取の御事依て御使を天上ハ奉_らせ給へる
ふりを大同本記ハ右ニ同ト傳を載せて皇御孫命
詔久後仁恐仕奉事勇乎志止詔_天天牟羅雲命天二上
命後小橋命止三名賜也と有て別神ハてハ坐せ_ごも
天押雲根神ハ並べて天牟_羅雲命と云名有し右ハ天浮
雲ハ乘て其御使ハ仕奉りしを以あり故叢雲と浮
雲とハ分ち云し其義一あるを見べし猶天孫本紀天
香語山命の兒天村雲命有り又神名式ハ阿波國麻殖
郡天村雲神伊自波夜比賣命神社ニ座と有ふと共ハ
此の劔の縁ハ非ずと雖も叢雲の例ハ引るあり云_因

天下學集小日本武
尊征東夷皇子
駿島原夷放
火原草而德之皇
子拔膺之劍一揮四
方一里之草不雜
具火自滅矣從此
改名曰草薙劍と
見元たるは古傳
か依れり者あり
可

此の叢雲劍を縁起小叢雲劍の作り拾遺小天叢
雲劍の作り通證小叢與叢同說文叢生貌云然
言ふ○故以名歟ハ上小蓋云云係りて此小終め
たり小て蓋と推量りて其來由を疑へる辭あり拾遺
ハ此と同一くすして此文を大蛇之上常有雲氣故
以為名に有ハ治定の辭あり其此方や勝りたりむ○
至日本武皇子改名曰草薙劍ハ縁起小倭武尊東征
之歳改名為草薙劍に見元又拾遺小倭武尊東征之
年到相模國遇野火難即以此劍薙草得免更名草薙劍
也と有る是あり故此大御劍の御所在より明りめ奉
らずハ有べくす其大略を云べし此下小素戔鳴尊

曰是神劍也吾何敢私以安乎乃上獻於天神也と有る
此事を古事記小故取此大刀思異物而白上於天照
太御神也と所見たりハ上ハ十小云るが如く白上右
の大蛇を退治させ給へり始末を奏聞し給へるふ
り上又其神劍を私小以安くす物として上獻ら
せ給へるあり是小於て皇太神の御言小我屏天岩屋
時落此劍江州伊布貴山是我劍也と詔給ひて受取り
せさせ給ひて其大御許小む留め置せさせ給へり
けりを天孫降臨章第一一書小故天照太神乃賜天津
彦ニ火瓊杵尊ハ坂瓊曲玉及ハ咫鏡草薙劍に見元

たす此御時小皇御孫尊小事依奉らせ給へりけ
る備其八坂瓊曲玉天下を事依授奉らせ給へる
大御璽小御在坐八咫鏡の其第二書小是時天
照太神手持寶鏡云々祝之曰吾兒視此寶鏡當猶視吾
可與同床共殿以為齋鏡之有て其此神劍小係させ給へ
る御詞無きを大殿祭詞小天津璽乃鏡劍子捧持賜天
言壽宣志皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座
坐氏天津日嗣子萬千秋乃長秋尔大八洲豐葦原瑞
穗之國子安國止平氣久所知食止言寄奉賜比之所見元
たす此安國止平氣久の御言不專其大御劍小就たる壽

詞小ハ有けし其此文小事問之磐根未根乃立知草
能可岐葉子言止其之有て武事を以て此天下を言和
させ給へる御言の有を以てし知べく下二百十引神宮の書共
小載たる皇太神の此時の御誓言小皇孫如八尺瓊之
句句以曲妙御宇且如白銅鏡以分明看行山川海原乃提
寸握神劍平天下其之有ハ信小此時の御言ありけむを
正史小逸して他書小傳ハ此る者こそ所思えたる此
神皇系圖天口事書神皇實録寶鏡問始等小出たす
校合せて其亘しきを取れ此事仲哀天皇八百年御紀
小筑紫伊都縣主祖五十五迹手聞天皇之行按五百枝賢
木立子船之舳上枝掛八尺瓊中枝掛白銅鏡下枝掛
十握劍參迎于穴門引島獻之因以奏言臣敢所以獻是
物者云々有て右小舉たる此小云る壽詞全同

ハ上件小謂ゆ
鏡劍二種を合
天照大神之書
此れたるして有
此れ其實素
素戔嗚尊の御名を
漏るれば者あり

トキを以て人皆取ざり事小てハ有れども決めて上
世ハ其御天降の時の古事を取て天皇を称奉れり
例あり者之所聞ゆれば本す) 崇神天皇六年御紀
同トウリぬ可事あり者不クハ 崇神天皇六年御紀
小先是天照太神云々並祭於天皇大殿之内然畏其神
勢不安故以天照太神託豐鍬入姬命祭於倭笠縫邑仍
立磯堅城神籬神籬此云比芥呂岐之所見たは此御事を古語拾
遺小至干磯城瑞垣朝漸畏神威同殿不安故更令齋部
氏率石凝姥神裔天目一箇神裔二氏更鑄鏡造鏡以爲
護身御璽是今踐祚之日所獻神璽鏡劍是也仍就於倭
笠縫邑殊立磯城神籬奉遷天照太神及草薙劍令皇女
豐鍬入姬命奉齋焉之見えてハ咫鏡を指て天照太神

景

心得く又神社考
詳節熱田宮條ハ
長明行海道記熱
田宮者素戔嗚尊
皆宮行天皇時
出雲國跡于此
有る此首出雲國
字ハ素戔嗚尊
申す小混れ出た
事ハ此宮を以て
以雖此宮を以て
其大神と祀奉る
三云ハ受る所有
て必古説る可
きと

こ申奉れりハ草薙劍も其御璽小渡りせ給へ
此れも素戔嗚大神小御体あり由ハ熱田大神宮鎮
座記小熱田大神一座合祭神一座素戔嗚尊云々元是
二座也至淨御原朝加三座之有を以て曉る可き者
あり若て垂仁天皇二十五年御紀小友倭姬命求鎮座
太神之處而云々到伊勢國時天照太神誨倭姬命曰是
神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可憐國也欲
欲居是國故隨太神教其祠立於伊勢國因興齋宮于五
十鈴川上是謂磯宮則天照太神始自天降之處也之有
る此れも素戔嗚太神の御名ふむ有る可き御事也

を略され被載せりけり後小草薙劔ハハ此御許
を放れさせ御在り坐て熱田神宮小鎮坐るを以り
皇太神宮儀式帳小此掛畏天照坐太神月讀大神二柱
所祢伊弉諾尊伊弉册尊共爲夫婦合所生神御形鏡坐
こ有る文を熟見り小御形鏡坐こハ右小謂ゆる天照
坐太神の御あり然り小此ハ皇太神の出自を申奉る
可き所ありさる小月讀大神を相並べ舉たりハハ咫
鏡ニ草薙劔と共小並御在り坐ける程あり傳の遺
れり者小して當昔ありさるハハ月讀大神御形劔坐
こ云べき文の決りて有べき所ありさるを已小熱田

祝

神宮小御在り坐す世こ成てハ其文の自然小略ハハ
ぬ可き事ありさる然りも此傳ハハハハ月讀大
神ニ素戔嗚大神ハ同神小渡らせ給へる確々あり
證小ふむ有けり但別宮小月讀宮ニ申す御在り坐せ
て倭姫命の古のありさるハハ右の文小抱ハハ可き事
小儀式帳所管社の中不出たり若くハ倭姫命の當昔
草薙劔を鎮奉らせ給へる御社ありけりハハ思ひ
皇太神の御許を離ち奉りて別處小御在り坐す可
き小非す又草薙劔と云名ハハ後小熱田神宮小鎮
り當昔の御名小御在り坐さハハハハ後小熱田神宮小鎮
小御在り坐る其大神の御爲小此小然りて景行天皇
遙宮を建て祀奉りたり小此小然りて景行天皇
四十年御紀小冬十月壬子朔癸丑日本武尊發路之戊

午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姬命曰今被天皇之命而
東征將誅諸叛者故辭之於是倭姬命取草薙劍授日
本武尊曰慎之莫怠也是歲日本武尊初至駿河其處賊
陽從之欺曰是野也麋鹿甚多氣如朝霧足如茂林臨而
應將日本武尊信其言入野中而覓獸賊有殺王之情謂
日本武尊也放火燒其野王知被欺則以燧出火之向燒而得
免一云王所佩劍藪雲自抽之薙攘王之傍草因是王曰
殆被欺則悉焚其賊衆而滅之故号其處曰燒津云有
右の枉道拜伊勢神宮云其纏向宮云出立せさせ
御在坐て直小東路小就て下りせ給云可云御事云

るを道を枉て殊更小皇太神宮小参入らむ云所思云
成ぬる云是云即草薙劍の東國を平治て其道口
こも云へき尾張國小留住せ給ハむ云所思云神の御
心小因れり者ありけ云古事記云故受命罷行之
時参入伊勢太御神宮拜神朝廷即白御姨倭比賣命者
天皇既所以思吾死子何擊遣云四方之惡人等而返参上
來之時未經幾時不賜軍衆今更平遣東方十二道之惡
人等因此思惟猶所思者吾既死焉患泣罷時倭比賣命
賜草那藝劍亦賜御囊詔若有急事解云茲囊口云有て右
の如く東西征伐り辛き事を申して患泣せ給へる小

此二種の神寶を授けさせ給へる御事を想像の奉る
小其御劔ハハも天皇の大御命を以て倭姫命の奉仕
りせ給へる太御神小渡りせ給ひ其御囊ハハも其下
文小火打見元て熱田大神宮鎮座記小謂ゆる天火
徹是あり此ハ甚し可畏き皇太神の御ハ八咫鏡の御
欽小御在坐セバ神宮の御許を放ち奉らせ給ひ
難き神寶して渡らせ給へる者を縁起小倭姫命感其
心授一神劔曰努カニ莫離於身又賜一囊若急事
解茲囊口倭武尊并領劔囊行見元たら如く感給ふ
とも皇太神の御諭して御在坐ざらむハ倭姫

命の御心ニハ行給ひ難き御心ありを以て天照太
神素戔嗚尊二柱の大御心小御在坐す可き事疑ふ
可くずふ有ける其御詞小若急事解茲囊口
て懇到小教授けさせ給へるを以て野火難の事を前知
とも所思めりし御事あり又右の慎之莫怠也と見
元授一神劔曰努カニ莫離於身有御言ハハ
其行未の御事をさへ小係て見徹し給へる御詞ハ
尊於氣吹山受病者所以放神劔於身故也と見えたり
此天火徹の御事ハ己小傳次小是歳日本武尊初至駿
河其處賊陽從之欺曰云々ハ古事記ハ故尔到相武
國之時其國造詐白於此野中有大沼住是沼中之神甚
道速振神也於是者行其神入坐其野尔其國造火著其

野之見元又古語拾遺ハ到相摸國遇野ハ難ニ有ル
事ハ相摸國ニ爲ル誤リ縁起ハ御紀ニ同
倭武尊到駿河之時賊帥陽從之欺曰是地也原野
蕭條目極四遠麋鹿爲群有娛遊獵倭武尊信其言入野
中覓獸賊有謀殺之意放火燒野之見元ハ駿河國ニ爲
るハ信ハ然ル事ハ又古事記ハ國造ニ有ル誤リ
可キ事ハ駿河ニ相摸ル其國ノ出來始ルハ此ノ
後ハ成務天皇御世ノ御事ハ有レけレ其以前
ハ御紀ノ上文ハ朕聞其東夷也識性暴強凌犯爲宗
村之無長邑之無首各貪封堺並相盜略之見元ハ是

余

小て右ハ謂ユ賊帥ニ云者是ハ國造ハ云べ
き者ハ未置レ以前ハ然ル者ハ有レべク非ルを
自國造ノ号ヲ僭シ称シ居タリケレバ今ハ日本武尊
の御在リ坐テ其罪ヲ亂シ彈サレ奉ラセ事ノ心ハ苦シ
くて然レ負キ氣無き逆事ヲ成セル者ハけレ國造
小珠流河國造志賀高穴德朝ハ御世ニ以テ物部連祖大新ハ可
川命兒片堅石命定賜國造ニ見ル元ハ廬原國造志賀高穴
德朝代ハ池田坂井君祖吉備武彦命兒意加部彦命定
賜國造ニ有レ此景行天皇四十年相摸國造志賀高穴德
過テ後ハ置ル神伊勢都彦命三世孫弟武彦命定賜國
朝武刺國造相神伊勢都彦命三世孫弟武彦命定賜國
造ハ次ハ小賊有殺王之情武尊ニ放テ火燒其野王ハ知レ被
有リ欺則以燧出火之向燒而得免ニ有レ下ニ云王所佩ハ劍

自抽之薙攘王之傍草因是得免故号其劔曰草薙也
有ハ古事記小尔其國造火著其野故知見欺而解開其
姨倭比賣命之所給囊口而見者火打有其裏於是先以
其御刀薙撥草以其火打而打出火著向火而還出皆切
滅其國造等即以著火烧こ見えて甚委事事有
ガ縁起を合せ見る小賊有謀殺之意放火烧野倭武尊
忽被註誤計略難施其所帶神劔自然抽出薙四面之草
又開所持囊中有火打一枚驚喜敵火向烧得免殺滅
其賊黨曾無噍類書有る此書次第を亘り可其其ハ
古事記先以其御刀薙撥草有れども此の一云小

自抽之薙攘王之傍草有ガ如く自然小抽出草を薙
亦む草薙劔名小負所由著く且慥ハる上小
縁起小計略難施見元たガ如く進退共小此小極
盡させ給へる所少て神劔の威靈を顯ハして皇子を
助救奉らせ給へる意味亦む甚深く所見たりけ然
るハ此神劔の自然小抽出て草を薙給へるハ皇子の
近傍小枯草等の有てハ終小其為小過ハハ此させ給
へるむを救奉らむコして其草を賊黨の屯する方へ
薙除けて其向火を著させ奉りて一時小滅ハ給ハ
む神謀多を皇子忽小其意を得させ御在ハ坐て其

御媛倭姬命の御言を思ひ出させ御在り坐て忽小
御囊口を解開させ給へば其天火徹ふむ出現ハ此
せ給ひけり故小火を打出て著させ給ひ却らま小彼
賊黨をいも悉く小焼亡が給へり故其御紀
の次文小玉曰殆被欺則悉焚其賊衆而滅之故号其處
曰焼津之所見た此古事記小焼退還出皆切滅其國
造等とい有北ごも實ハ刃小血ぬさずして焼亡不
させ給へり事決ふき者あり神名式小駿河國益頭郡
焼津神社御在り坐を風土記小焼津神社瑞苗別天皇
四年己酉所祭市杵島比咩也と見えたりハ此時小助

奉らせ給へり古傳の存て其復反正天皇御世小令
祭給へり小ころ万葉三二十小焼津邊吾去鹿齒駿河
奈流阿倍乃市道尔相之兒等羽裳と有る是あり通證
名枚益頭郡萬之都風土記作麻賤疑益頭本焼津之音
後轉爲萬之都也云云ハ然言あり此御社府中よ
明神南三里計あり所の海邊小焼津村と云有て入江大
又傳二十四小己小引り風土記小安倍郡思津機山
志津機神社日本武尊征東蝦夷之時遭野火屯此山避
其勞厄尊深志專守倭姬命之神教神教見依之以拷播
千二姫祭此山合之以稚日女尊天照太神有深理潛心
本女功依西神名與と見えたり其功業而号之也榜幡千二姫命ハ己小

十九百九十丁二小許カ如く御戸開神小御在一坐て古
語拾遺小謂ゆク天棚機姫神是カ次小其種日女尊
と申奉ルハ彼三女神の御事小御在一坐て其女二小
依ルハ御名を第棚機姫神と申奉ル由傳十五三百三
十七八十丁二十三十三小條ト小説奉ルカ如ク三三柱此の女
神ハ一も軍事を守らせ給フ神小御在一坐せハ此野
火難を救ハせ給ヘる小依て祀らせ給ヘりけニ事又
右の焼津神社の御事を以てモ知べきを同記小益頭
郡益頭云ク原木神社勾大兄廣國押武金日天皇二年
乙卯二月所祭手カ雄神也ト有ハ遙小世を經て後小

又同記小鳥渡
郡真日神社所
祭手カ雄神
也ト有ハ由有

祀ルハ此ト者ク益頭ミシツと焼津ヤキツと二處小分レ此ト事
ふれドも共ニ古の焼津の地ありけレハ由有ニ其手
カ雄神ハ一も右の枘幡子ニ姫命と相並バりて共ニ
御戸開神少シて渡らせ給ヘるを上小云フ焼津神社ハ
市杵島姫命小御在一坐ル多ク合セ祭ルハ無レ此ト
と右の志津機神社と同例ありト故有ル御事小ニり
ハ御在一坐べりけレ但右の三社ハ式外あり又神
名式小廬原郡久佐奈岐神社見カ風土記鳥渡郡草薙神社一書
日日本武尊越東夷至駿河國浮島原與安倍市東夷欺
尊託狩獵ハ遊御廣野日中縱ハ于時十月旬衆草枯死

而恰如^油烟已進而尊軍危所帶之叢雲劔自脫拂野火
 依此有草薙名^{略中}此神社者所祭天照太神之地也之書
 せり^其廣野ハ其上小吉田川^{出自廬原川}廣野社日本武尊
 所奉祭素戔鳴尊也之所見た此ハ此勞厄を免れし
 せ給へり一所以を以て同時小齋奉らせ給へるあり
 けり又其草薙神社の次小草薙山^{武矢山}云名有ハ其
 神劔の自抽出て草を薙たりよりの名あり可く或矢
 田山と云ハハ咫鏡の御事小して其御欽の天火徹を
 以て向火を著させ給へり一跡あり可く思ハれ又其
 次小深澤出鯉鰻魚當國造之用と有ハ上小引る古事

△リ然れども夫ハ
 載れり^{伊豫郡}
 異る^難
 上の方ハ此

記小其國造詐白於此野中有大沼住是此沼中之神甚
 道速振神也之有沼あり可く所思えたり又風土
 記^{伊豫郡}東草奈岐^{或久佐}云々草奈岐神社種足彦天
 皇元年辛未始祭之奉官幣之有ハ式外ありハ此ハ野
 火難小遇給へり一其東の極ありを以て其成務天皇
 の御世小祭りしめ給へる小ころ有けり此即此小至
 日本武皇子改名曰草薙劔之書了せ給へる御事之所
 以ありけり然る小風土記小引る香具山日記小叢雲
 草薙亦別名也草者生無主之地此葦原自天孫降臨無
 草叢之神專其國種然焉如^{葦原}草薙^{利孫拂}其技葉故天
 孫降臨之後有草薙之号云々云々^{神代}諸右小
 己ハ此号有と思へる者ハ甚しう^{辭説}あり

見元長明云行海道
記熱田宮素戔嗚尊也
嗚尊也
其攝神八咫神
社素戔嗚尊
和魂也
傳又此
小舉也
神
社
彼
難河
起
神
社
素戔嗚尊
神
云傳

謂ゆら二所の草薙神社ハ一も天照太神小渡らせ給へる事風土記の文小依て著明且此ハ草薙劔の威靈を顯ハさせ御在り坐けり御迹を尊び奉らせ給ひて齋奉らせ給へる事天照太神素戔嗚尊二柱の大御靈小御在り坐せども其主神を記して從祀を漏されたりし者之見奉可き事右百六十小引り熱田大神鎮座記小熱田大神一座合祭神一座素戔嗚尊有を以て天照大神之共鎮御在り坐す御事を思合せて考ふ可し此素戔嗚大神の御事ハ一も十五三百上ハ丁小註るか如く掛まくも甚し可畏き天神御子の御祖神小御在り坐せば天照太神小亞てハ

最し至尊に奉らせ給ふ可き御事申奉りし更あり彼崇神天皇の大御世小鏡劔を鑄改めさせ給へる後小も猶皇太宮小ハ其御模造を留りし此て今も古の如く祀奉らせ給ふ御事小渡らせ給へるを中古より以降如何ありける荒振神の心ありけむ其大御劔ハ此素戔嗚大神の大御靈小御在り坐す御事を忘れさせ給へるか如く成て外一思成し奉らせ給へる状小成以て來ぬるこり天津日繼の御爲も天下後世の爲も祥ハくさる事一所思元たりけり己小日本武尊の御時小至り迄も其御崇敬厚く御在り坐

けり證ハ傳二十二二百四十四丁上十九云々如神名式ハ武藏
國足立郡氷川神社名神大月を頭注ハ日本武尊東征
之時勸請素戔鳴尊也見元入間郡中氷川神社を日
本武尊東征之時勸請稻田姬命有此御一事を以
て當昔の御消息をおむ想像り奉る可うりけり然る
小其草薙劔の鎮り御在ハ坐す執田大神ハ也名神
大社ニ申奉らりて迄ハて宮号をし進らせられず自
餘の大社ニ等し並ハ小會釋ひ奉らせ給へるニ朝威
の衰へさせ御在ハ坐て人臣の朝廷ハ傲ら種ハハハこ
ハ成れ者ハて上古の天皇をハ天壓神ト可畏ニ奉

けり神武カ大御稜威の萬國ハ振ハせ給ハざらる
始ハ成けれト悲しとハ何ト云ハ小言無クおむ有
けり然レも天照太神の大御心ト其神劔を日本武
尊ハ授けさせ御在ハ坐て東國の咽喉ト有ル尾張國
小留止らせ給ハ御事ニ成れるハ即其東夷をハ押へて
朝威を萬國ハ振ハり給ハ神慮ト推量り奉らりて
比年東夷の皇國をハ窺み寄ふ就テも信ハ奉らる所無ク
ハ非ズおむ有けり己ハ古語拾遺ハ至大寶年中初有
記文神祇之簿猶無明案望秩之礼未制其式至天平年
中勘造神帳中臣專權任意取捨有由者ハ祀皆列無縁

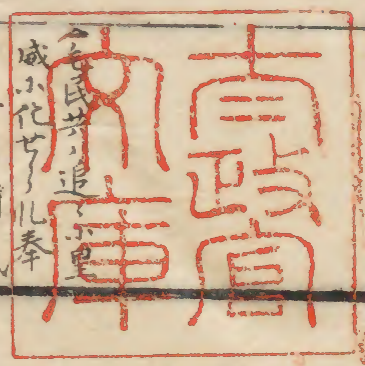
者大社猶廢云々況後草薙神御者尤是天璽自日本武
 尊愷旋之年留在尾張國熱田社外賊偷逃不能出境神
 物靈驗以此可觀然則奉幣之日可同致敬而久代闕如
 不脩其礼所遺一也之有て其遺失十一條の第一小舉
 り此たふふ心實不然る言ありけり朝家の御為ハ申
 奉りし更ふり天下の為ふし今一等の礼典を加へさ
 せ御在り坐て伊勢太神宮ハ及奉りせ給ハざる事ハ
 今更小申奉り限ハ非すと雖も相亞ぐ計り御崇敬
 を加奉らせ給ひて天照太神と相並びて此素戔鳴尊
 ハハハ天皇の大御祖神とて渡らせ給ふ御事と別

諄

天下上下の人も共小相知る可き時をふむ下待此
 侍りけり猶傳二十六卷熱田神宮の下小説奉るを見
 上世小此大神の御事た小申せば天照太神と相
 大君主宰と御在り坐す掛おくも可畏き皇御孫尊の
 大御祖神小渡らせ給へり又此尾張國小留まらせ御在り
 く諫言ハ物為るる又此尾張國小留まらせ御在り
 坐す御事ハ上百十九丁小引る景行天皇四十年御
 紀小朕聞東夷也識性暴強凌犯為宗村之無長邑之無
 首各貪封堺並相盜略之有て古事記小謂ゆり相武國
 造の如き自立せし者も有て程の事あり其を
 鎮めて大神の鎮坐りて後小源頼朝源尊氏の如き
 朝家小傲る者も出來りて大神の御守護厚き小固れり
 小至らざる然ら云へ大神の御守護厚き小固れり
 者も至りて天下の悉く乱れたる極人々を御守護
 織田大臣豊臣關白又東照神君の如き人々を御守護
 ひて世中を令鎮給へるあと甚く妙小奇く御守護

日本書紀傳二十三

百七十七



成小化せし奉
りて今皇國の民
三成ルを其俗已
く東荒夷人小移
御國



有る事共ありと人此大神の御心も何と
尤強馬男又同ト右の續きの文小其東夷之中蝦夷是
血昆身相疑登山如飛禽行算如走獸承恩則忌見怨必
報是以箭藏頭髻カ佩衣中或藜黨類而犯邊界或伺農
桑以略人今擊則隱草追則入山改往古以來未染王化
南小渡直りて一大洲有りと荒の中在る毛人國
往子漸次小開墾き終つるを遥西の國を其を南北阿
米利加云事多し終つるを遥西の國を其を南北阿
号けさせ給へる夏北東荒夷云て我皇家
けり小政嘉永六丑年夏北東荒夷云て我皇家
爲す御奴國とて梳鞭の貢を同來り奉り來初て
劫ヤッて交易の事依せて皇國を同來り奉り來初て
さるて通商交易を望む事と成て終小彼が使節を
て征夷府の許小置ける事と成て終小彼が使節を
小社奉幣の御事御在し坐て此熱田大神と一其

明治七年甲戌七月以先師總積重胤
稿本一校了

酒田縣管下羽後國飽海郡御良
佐藤信夫

